

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 15 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24500691

研究課題名(和文) 自然体験療法における軽度発達障害のある生徒の障害特性と心理的成長の検討

研究課題名(英文) Psychological growth of adolescents with developmental disorder in outdoor experiential therapy

研究代表者

坂本 昭裕 (SAKAMOTO, Akihiro)

筑波大学・体育系・教授

研究者番号：10251076

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、軽度発達障害の生徒を対象に自然体験療法(Outdoor Experiential Therapy)を試み、障害特性と心理的成長の関連について検討した。プログラムに参加した発達障害児の自己概念は、自尊感情の低さと、他者からの評価の意識が高いことが特徴であった。自我発達の質的側面の変化における検討では、プログラム前後の変化は、自閉症スペクトラム障害児で大きい変化を示す事例が認められた。自然体験療法プログラムは、自閉症スペクトラム障害児の内的世界形成にきわめて有効であることが事例から示された。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to examine the impacts of the Outdoor Experiential Therapy Program on the self-concept and the qualitative aspects of ego development for participating adolescents with mild developmental disabilities. The self-concept of developmentally disabled adolescents may be said to be characterized by low feelings of self-esteem and high awareness of evaluation by others. The evaluation on qualitative aspects of ego development indicated the development of clients' internal mental landscape or world formation on the adolescent with autistic developmental disorder after the program.

研究分野：野外教育

キーワード：野外教育 自然体験療法 キャンプセラピー 冒険教育 発達障害 自己概念 風景構成法

1. 研究開始当初の背景

文部科学省が実施した全国調査によれば、学習障害 (LD)、注意欠陥・多動性障害 (ADHD)、高機能自閉症 (アスペルガー症候群を含む) 等の軽度発達障害を有する児童生徒数は、約 6 パーセント程度の割合で通常の学級に在籍していると報告している。このような比較的軽度の発達障害の状態を示す児童生徒は、周囲の人から気づかれにくく、通常的生活環境で生活することが多い。しかし、認知行動上の特性から、学業面の問題だけでなく、集団内不適応や自信の喪失、対人的な問題が生じやすいため、いじめや不登校などの二次的障害につながりやすいことが指摘されている。このようなことから、発達障害の児童生徒に対する支援策を講ずることは、わが国の教育における喫緊の課題となっている。

キャンプ等の自然体験療法 (Outdoor Experiential Therapy) は、豊かな自然環境における生活体験やアウトドアアクティビティ等のスポーツ体験を通して子どもの問題を改善し発育発達を支援するプログラムである。わが国では、これまで不登校や発達障害などの児童生徒への援助アプローチの 1 つとして活用されてきた。その理由として、キャンプは小集団での構造化されたプログラムによって、クライアントの対人的な技能や自己意識の改善を図りやすいということがあげられよう。現在、発達障害児の支援方法には、薬物療法などの医学的な支援と教育、心理的な支援があるが、自然体験療法は、後者の役割を担うものとして期待が大きい。

申請者は、これまで科学研究費の助成を受けて不登校や軽度発達障害を有する生徒を対象に自然体験療法を実践してきた。そこで明らかになったことは、軽度発達障害特性をもつ生徒達の自己概念は、全般的には改善し心的成長が促進されるが、一方できわめて個別性が大きいことである。すなわち、自然体験療法における心理的成長には、いわゆる発達障害特性に加えてクライアントの固有な特性が大きく影響している。これまでは、クライアントの障害特性を分類することが容易でないことや、自然体験のプログラムが稀であったことなどから、クライアントの特性の相違と心理的効果の関連は検証されてこなかった。しかし、発達障害の児童生徒を対象に自然体験療法の効果を上げるには、参加するクライアントの障害特性や活動中の行動特性を正確にアセスメントし効果が見込まれるプログラムを検討することが欠かせない。

したがって、プログラム過程における軽度発達障害のクライアントの特性と心理的成長に及ぼす影響との関連が明らかにされる必要がある。本申請における研究課題が解明されるならば、自然体験療法における介入プログラムの開発や構造化に役立ち、よりよいプログラムの構築に貢献できる。

2. 研究の目的

本研究は、軽度発達障害の生徒を対象に自然体験療法を試み、障害特性と効果の関連について検討することである。参加する生徒の障害特性の違いから自然体験療法プログラムの 1) 自己意識に及ぼす効果について検証する (研究 1)。次に、2) 参加する生徒の自我構造の変化について風景構成法から検討する (研究 2)。また、3) 障害特性と心理的成長に及ぼす効果との関連を検討することである。

3. 研究の方法

(1) 対象者

本研究の対象者は、自然体験療法プログラムに参加した軽度発達障害の生徒 17 名 (平均年齢 13.7 歳、SD=1.0) を対象者とした。

(2) データ収集

面接調査 (研究 1・研究 2): プログラム前、プログラム中、プログラム直後、プログラム 1 ヶ月後の 3 回~4 回にわたって面接を実施した。初回面接では、参加の動機や現在の課題などについて聴取した。その後の面接は、その時の気持ちや考えを自由に語ってもらった。面接の時間は 40 分~60 分だった。

自己成長性検査 (SAS) (研究 1): 4 つの下位尺度から構成され、31 項目からなる質問紙をプログラム前、プログラム直後、プログラム 1 ヶ月後に実施した。

風景構成法 (LMT) (研究 2): プログラム前、プログラム後、プログラム 1 ヶ月後において 2 回~3 回の風景構成法と呼ばれる描画法を施行した。風景構成法の施行は、面接調査に引き続き実施した。

(3) 自然体験療法プログラム (以下キャンプ・プログラム) の概要

キャンプ・プログラム

キャンプは、X 年 7 月~X+1 年 10 月の間に 3 回実施され、のべ日数で 20 日程度であった。それぞれのキャンプの主なプログラムと日程は、以下の通りであった。

- ・事前説明会 (インテーク): 1 泊 2 日
クライアント及び保護者へのキャンプの趣旨・プログラムの説明、インテーク面接。
- ・メインキャンプ: 3 週間程度
マウンテンバイクによる旅型の自然体験活動 (キャンピング、登山、ロック・クライミング、沢登り、カヌー等)。
- ・ポストキャンプ I : 1 泊 2 日
メインキャンプのふりかえり、軽レクリエーション活動
キャンプのグループ
キャンプは、クライアント 5 名~6 名にキャンプカウンセラー 2 名からなる小集団 2 グループで活動した。その他に、プログラム・ディレクター 1 名、マネジメントスタッフ 2 名、心理カウンセラー 1 名 (本研究者) から構成されていた。

4. 研究成果

研究1 軽度発達障害の障害特性の違いが自己概念に及ぼす効果の検討(量的研究)

(1)自然体験療法(OET)における発達障害児の自己概念への効果

SASの4つの下位尺度の得点についてプログラム前(Pre)、プログラム後(Post1)、1か月後(Post11)の分散分析を行った。その結果、達成動機について有意差($p<.01$)が認められ、その他の下位尺度では、有意差は認められなかった。有意差の認められた達成動機について下位検定を行ったところ、プログラム後の得点は、プログラム前と1か月後の得点の間に有意差($p<.05$)が認められた。

(2)自然体験療法(OET)に参加した発達障害児の自己概念の変化の特徴

定型発達児を対象にしたSASを測定した先行研究があるが、本研究では、定型発達児の自己概念の得点との比較から発達障害児の自己概念の変化の特徴について検討した。発達障害児の自己概念への効果は、飯田・中野(1992)における定型発達児と類似したパターンを示した。しかし、SASの得点の平均値を見るならば、発達障害児では、定型発達児に比較してプログラム前後の自信と自己受容の得点が低く、他者のまなざしの得点が高かった。

(3)発達障害の違いが自己概念に及ぼす影響

ADHDとASDの2つの異なる発達障害が自己概念に及ぼす影響について検討した。達成動機において時期における主効果が認められた。また、他者のまなざしにおいて交互作用に有意傾向($p<.10$)が認められた。単純主効果の検定の結果、ADHD児において、プログラム直後と1か月後の間に有意差($p<.05$)が認められた。しかし、達成動機の時期以外の主効果は、その他では認められず、また、他者のまなざし以外で交互作用は認められなかった。

(4)まとめ

発達障害児に対するOETの効果は、達成動機において認められた。この下位尺度には、「私は、自分の能力を最大限に伸ばせるような色々なことをやってみたい」「私は自分の理想に向かって絶えず向上していきたい」などの項目が含まれており、プログラム終了までに発達障害児の理想自己への達成意欲を高めたと考えられる。しかし、1か月後まで効果は維持されなかった。

また、自己概念への効果の特徴について定型発達児との比較から検討した。各下位尺度における自己概念得点の変化は、定型発達児とほぼ類似した様相を示した。しかし一方で質的な差異も認められた。一門(2008)は、発達障害児の自尊感情について、定型発達児と比較し、自信因子と自己受容因子が有意に低いことを報告しているが、本研究の発達障害児においても、自信と自己受容のプログラム前後の得点は、定型発達児よりも低くかつ

た。また、他者のまなざしの得点も発達障害児は、定型発達児よりも高かった。他者のまなざしには、「私は、他の人からどんなうわさをされているのか気になる」「私は自分が少しでも人からよく見られたいと思うことが多い」などの項目から構成されている。したがって本研究の対象児であった軽度発達障害児は、自己に関する他者評価的な意識が高かったと言える。

研究2 軽度発達障害の生徒の自我の変化に関する研究-風景構成法における検討から-(質的研究)

(1)風景構成法における描画の構成型の特徴

中学生以降に見られる構成型の特徴としてI~III型(自己中心的段階)はまれか、あっても非常に少なく、最も多いのは型(自我の対象把握可能な段階)で25%~50%を占め、次いで型で30%強、型は10%弱であるといわれている。本研究では、I~III型に占める割合が、59%でありきわめて低い構成段階を示し、定型発達における構成型の分布とはかなり様相が異なっていた。自我発達の観点からいえば、自分の見たまま、思ったままを描く自己中心的な自我にとどまっている者が多いと言える。

プログラム後(Post1)には、17例中6例(Post2では8例)において上位の構成型への変化が認められ、型と型が増加した。しかし、質的に異なる型以上へは1例しか増えなかった。

(2)事例研究

プログラム前後の風景構成法の描画に特徴的な変化を示した事例に着目し検討を行った。

本研究における発達障害児は、構成型の結果に示される通り、構成型に変化が見られない事例が多かった。しかしながら同じ平面的な構成(I~III型)を示していたとしても、描画の内容が変化してゆく特徴的な事例も認められた。

検討された事例では、いずれの事例も構成型の段階が低く、描画自体の内容も定型の発達レベルからみればかなり低かった。しかしプログラム後の描画は、風景の内容が変化していることが明らかであった。特に、プログラム前後において、描画のそれぞれのアイテムが関連をもって描かれてゆく様子が理解された。また、いずれの事例もASDにおける自閉的な側面が問題(症状)形成に影響していたが、プログラムの体験によって問題の一部の改善が認められた。

風景構成法は、クライアントの内面の心象風景、あるいは世界形成(世界の見えや世界との関わり)の進展(あくまでも平面的な世界形成であるが)を示していたものと考えられた。

研究3 障害特性とプログラムの効果との

関連の検討

(1)自己概念の変化とプログラムの関連

ADHD 児と ASD 児について自己成長性検査の得点から自己概念の変化とプログラムの関連について検討した。当初、障害の違いによって異なる効果を予測していたが、明確な効果の違いは確認できなかった。しかしながら、発達障害児の自己概念は、自尊感情の低さと、他者からの評価の意識が高いことが特徴と言える。OET においては、このような意識を大幅に改善することはできなかった。

OET のプログラムにおいて低い自尊感情や過度に他者から評価されると感じている意識を肯定的あるいは、自然な意識に変化させるには、発達障害児が成功の大小にかかわらず、成功したと感じられる体験を繰り返し得られるような工夫が必要である。また、他者との比較で自己を評価するという視点だけでなく、過去に比べて今の自分がどれくらい変化したのかという個人内における自己成長感を抱けるような支援が必要になる。プログラムにおいては、このような自己の変化について、目に見えて理解しやすい形で発達障害児にフィードバックされることが重要であると言える。

(2)自我発達の質的側面の変化とプログラムの関連

風景構成法の構成型に着目し自我発達の質的側面の変化から、ADHD 児と ASD 児の比較を行った。その結果、ADHD 児で質的評価が高く、自我の発達段階の高い生徒が多かった。しかし、プログラム前後の構成段階の変化は、ASD 児で大きい変化を示す事例が認められた。

このような ASD 児の変化をもたらす要因として、キャンプカウンセラーとクライアントとの「共体験」による関係性形成が重要であることが明らかになった。このことが、ASD 児の内的世界形成にきわめて有効であることが事例から示された。

また ADHD 児では、自然体験療法プログラムにおける、援助（治療）構造等の枠組みが奏功することが明らかになった。それは人為的で操作が可能な構造というよりは、自然環境のように外的で、操作が困難なものによる構造が有効である。自然の中で行われるプログラムの予期することのできない構造が有効な要因であった。さらに、プログラムにおける実際体験は、自信や自尊心の醸成につながり、ADHD 児では比較的日常生活へのシンボリックな体験として意義を持つことが認められた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 3 件)

吉松 梓, 坂本昭裕: 冒険キャンプに参加した不登校女子生徒の体験過程 - 思春期における「身体性」に着目して - . 臨床心理身体運動学研究, 15: 53 - 64, 2013. (査読有)

坂本昭裕: 子ども達の悲しみを支えるということ-グリーンキャンプの試みに向けて-. キャンプ研究, 15:3-13, 2012. (査読無)

向後佑香, 坂本昭裕 (2 番目), 他 11 名: 大学体育が大学一年生のメンタルヘルスに及ぼす影響. 大学体育研究, 34: 39-45, 2012. (査読有)

〔学会発表〕(計 13 件)

Akihiro Sakamoto: Therapeutic factors in outdoor experiential therapy program of truant adolescents. 14th European Congress of Sport Psychology, Bern (Switzerland), 2015. 7.16.

大友あかね, 坂本昭裕, 黒田拓史: 統合型キャンプにおける不登校児童生徒の自己イメージと被受容感に関する研究-個別事例に着目して-. 日本野外教育学会第 18 回大会, 国立阿蘇青少年交流の家(熊本県阿蘇市), 2015. 6.21.

向後佑香, 坂本昭裕: 大学キャンプ実習における自己概念の変容についての一考察. 日本野外教育学会第 18 回大会, 国立阿蘇青少年交流の家(熊本県阿蘇市), 2015. 6.21.

坂本昭裕, 向後佑香, 渡邊 仁, 吉松 梓, 杉岡品子: 野外教育における心理臨床的アプローチ-事例に学ぶ VI -思春期を生きる子どもの身体に学ぶ-. 日本野外教育学会第 18 回大会, 国立阿蘇青少年交流の家(熊本県阿蘇市), 2015. 6.19.

Akihiro Sakamoto, Yuka Kogo: Characteristics of the Landscape Montage Technique used by adolescents with developmental disorders who took part in outdoor experiential therapy. 42rd Annual International AEE Conference, Chattanooga(United States of America), 2014.10.24.

黒田拓史, 坂本昭裕: 統合型キャンプが不登校児童生徒の自己イメージに与える影響-受容感との関連からの検討-. 日本野外教育学会第 17 回大会, 日本野外教育学会第 17 回大会, 東京海洋大学(東京都品川区), 2014.6.22.

向後佑香, 坂本昭裕: キャンプにおける自己概念の変容に関するメタ分析. 日本野外教育学会第 17 回大会, 日本野外教育学会第 17 回大会, 東京海洋大学(東京都品川区), 2014.6.21.

大友あかね, 坂本昭裕, 澤江幸則: 発達障害児におけるキャンプが及ぼす効果について-自尊感情に着目して-. 日本野外教育学会第 17 回大会, 日本野外教育学会第 17 回大会, 東京海洋大学(東京都品川区), 2014.6.21.

坂本昭裕, 向後佑香, 渡邊 仁, 吉松 梓, 杉岡品子: 野外教育における心理臨床的アプローチ-事例に学ぶ V-. 日本野外教育学

会第 17 回大会，東京海洋大学（東京都品川区），2014.6.21 .

Sakamoto Akihiro: Effect of Outdoor Experiential Therapy on Self-concept in Adolescents with Developmental Disorder. International Society of Sport Psychology 13th World Congress of Sport Psychology, Beijing(China), 2013.7.23.

坂本昭裕，渡邊 仁，吉松 梓，杉岡品子：自主シンポジウム 野外教育における心理臨床的アプローチ - 事例に学ぶ IV - .日本野外教育学会第 16 回大会，京都教育大学（京都府京都市），2013.6.22 .

向後佑香，坂本昭裕：大学体育が新入生のメンタルヘルスに及ぼす影響，日本スポーツ教育学会第 32 回大会，中京大学（愛知県名古屋市），2012.11.11 .

吉松 梓，坂本昭裕，渡邊 仁：不登校生徒の長期冒険キャンプにおける体験の意味について-思春期における「身体性」に着目して- .日本野外教育学会第 15 回大会，沖縄キリスト教大学（沖縄県那覇市），2012.7.8.

〔図書〕(計 3 件)

坂本昭裕他：情緒面の課題を抱える子どもへのキャンプセラピー．情動と運動 - スポーツとところ - ，朝倉書店 ，224(116-134)，2016 .

坂本昭裕他：不適應の子どもの身体-<私>の身体を生きることのむずかしさ- . 身体性コンピテンスと未来の子どもの育ち，明石書店，256 (160-183)，2014 .

坂本昭裕他：キャンプカウンセリング．キャンプの積み木，日本キャンプ協会叢書，108 (77-87)，2012 .

6 . 研究組織

(1)研究代表者

坂本 昭裕 (SAKAMOTO, Akihiro)
筑波大学・体育系・教授
研究者番号：10251076

(2)研究分担者

渡邊 仁 (WATANABE, Hitoshi)
筑波大学・体育系・助教
研究者番号：70375476